

# ベルグソンの形而上学と科学

筒井文隆

(引用のページは HENRI BERGSON OEUVRES (P. U. F.) の頁を示す)

## 第一章 概観

### ① 形而上学と科学

『形而上学入門』によれば、知識は二つあり、一つは測定の見地から対象を扱う物質の研究即ち科学的知識である。他は実在 *la réalité* と共感する精神の研究であり、これが形而上学である。科学の常習機能は分析、つまり記号への翻訳だから、記号を増加させて際限がない。形而上学は実在の翻訳でなくてその直観を得る方法、「記号なしですまそうとする科学」(p. 1396)である。分析の達する概念・図式の本質的特徴は、それが考えられている間は不動なることである。直観は運動そのものに入り変化の中に具体的なものを認める。直観によってのみ把握できる実在は少くとも一つある、それは「持続する自我」(p. 1396)である。直観は「本質的に能動的な特性」(p. 1416)を持ち、哲学は自我の観照にのみ閉じこもることはない。直観は単一な行為でなく無限な系列であり、その種々が存在者のあらゆる度合いに対応し、持続に身を置けば、「或る極めて決定的な緊張感」(p. 1417)が得られ、その決定性そのものが無数の可能な持続の一つの選択として現れる。ではどうして我々は自己の持続に閉じこもらないか。持続の具体的流れに入る場合、そこに「雑多で様々な持続を措定する論理的理由は少しも見出されないであろう」(p. 1419)我

我の持続の直観は、上下いずれへも追求できる持続の連続性全体と接触するというのであるが、その仕方は一つの比喩によって語られる——厳密には我々の持続以外に持続はないかも知れぬ、橙色以外に色が世界に存在しないかも知れぬように。しかし色の底に存する或る意識が橙色を外的に知覚する代りにそれと共感するならば、赤と黄の間に自分が入っているのを感じ、赤から黄へ移行する連続性を感じるとる筈である。

我々はかくて自己を超える。下方に超えれば分散する持続があり、極限に存する純粹等質・純粹反復によって「物質性」が定義され、上方に進むとき持続は緊張し、極限に「生の永遠性」がある。直観はこの両極間を動き、「その運動が形而上学そのものである (p. 1419)」

では直観とはどんなものか。論理的理由はないにしても他の持続との接触は如何にして可能か。物質性、生の永遠性は何を指すか。

## ② 原理と方法

直観運動の諸段階を巡歴することはここでできぬが、方法の概観を示しその依拠する原理を定式化するという。

(i) 実在||運動性 外的で而も精神に直接なる一つの実在がある、それは運動性 *mobileté* である。既成の物 *des choses faites* はなく生成する物 *des choses qui se font* があるばかりである。我々の意識は実在の連続的流動に於いて一つの実在の内部へ我々を導く。

(ii) 知的操作の逆転 知性が固形の知覚と安定した概念によって進み不動の函数として動を見るのは、行動が実在に対して設定する実践の問題であり、実在をとり逃す。我々は絶えず変る実在の方向に一致してそれを把握できる。

「哲学は思考作用の習慣的方向を逆転することに存する (p. 1412)」

(iii) 科学と形而上学との接点 一度得られた直観の表現及び応用の仕方は、静止した概念の中に固定点を与えるものでなければならぬとするところから、科学のいう相対性が生ずる。不動から動へ進めば相対的であるが、動の中に

身を置く直観的知識は絶対に達する。しかし科学も対象を得るのは、「その対象を与える元になるところの而も渾然とした直観 (p. 1416)」からである。「直観以外のすべてを産出し得た直観 (p. 1423)」を忘れなければ科学と形而上学は直観に於いて結びつく。ここで直観という語によって表現されるものは、「主として精神を精神で知る内省的認識のことであり、副としては物質の中にある本質的なものを精神で知る認識のことである (p. 1424 註)」

(iv) 直観の材料 科学によって集められた観察と実験の全体は直観の材料になるという。實在の表面的な現れと親交しておかねば、「實在についての直観、即ち實在が持つより内的なものへの精神的共感を得ることができない (p. 1432) G. p. 490。」

直観を得る方法は、科学の提供する材料から分析を許した元のものへの溯行という一面を持つ。科学は絶対に連繫するならば既に直観から発しておらねばならぬ。

### ③ 『創造的進化』に於ける《円環運動》

これから『創造的進化』に於いて直観・知性・物質等を考察する。《円環運動》とは、形而上学・認識論・進化の経験的研究三者の相互関係を指す。「一方に於いて、もしも知性は物質に直観は生命に調子を合わせて出来ているならば、知性及び直観の対象の精髓を抽出するためには、知性と直観を締めて絞ることが必要であろう。それ故形而上学は認識論に依存することになる。しかし他方、もし意識がこのように直観と知性とに裂かれているとすれば、物質に対処すると同時に生命の流れにも乗るといふ必要からである。かくて意識の二分 le dédoublement de la conscience は實在の二重形式に基くことになり、認識論は形而上学に依存する。真相は、この二つの探求はどちらからも他へ導かれる。二つは円環をなしており、この円の中心は進化の経験的研究の他にはあり得ない (p. 646)」これを見ると、認識論は意識（知性と直観）の研究、形而上学は實在の二重形式（物質と生命）の研究である。進化の研究によって得られるものは後に見る如く生命の哲学 la philosophie de la vie である。進化の考察から知性と直観の成

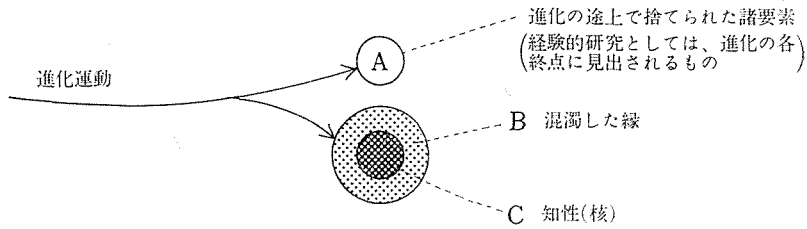
立が明らかにされるから、認識論は円の中心から援助を受けることになろう。生命は《物質の中を投げられて進む意識》であるから、進化を辿ることはとりもなおさず意識と物質の問題を惹起し、形而上学にかかわらざるを得ない。

## 第二章 進化の経験的研究

(1) 進化論に於ける哲学的命題 種の発生は我々に見当のつかぬ不連続な過程を経たとしても、進化論の想定する関係は依然として立てられる。そこで問題とするのは観念的血縁 *une parenté idéale* であつて物質的血統 *une filiation matérielle* である。「そのような観念的血縁を示す諸形態の現れ方は同時的でなく継起的であつたといふことはどうしても認められることになろう(G. S. II)」哲学者から見て重要なのはこの点である。このようにして二重の基本命題が成立する。①観念的血縁を示す諸形態は継起的である。②諸形態の間には論理的関係のあるときは、その諸形態の物質的な現れとしての様々な種の間にも継起の関係がある。

物質を担つた生命の全歴史を物質的血統と呼ぶようである。それをそのまま知ることが不可能であるが、親Aの子は変異してA'となり孫は更にA'に変わったといふ変遷の《図式》が観念的血縁なのであろう。ところで、「或る瞬間に、空間のいくつかの点に、はっきりと見ることできる流れが生まれ出た(G. S. II)」という。見えるものはどこから来たかと問えば、我々は見えるものから見えないものへ進化論想定の場合を拡大せねばなるまい。

(2) 生命の哲学 生命活動の本性を把握するためには、生命が人間まで進化する途上で捨てられた全要素を探し出して知性と融合させねばならぬ。その際判明な知性を囲む混濁した縁が助けとなる。これは進化の本源のうちで我々まで縮まらなかつた部分が密輸入されたものではないか。してみれば知性を超えて高まるに必要なはずみを受ける原動力はそこにある。「余すところなき知性は更に、進化の各終点に見つかれるものを副えねばならぬであらう。そしてそれら様々な方向の諸要素をエキスがそれだけあると見て、これらのエキスは相互に補い合っているか、少くともこ



く下等な形態であった頃には補い合っていたものとせねばなるまい。そこで初めて我々は進化運動の性質を实在そのままに予感することになろう。それでもまだ予感するにすぎぬ、何故なら我々の扱うのは進化を遂げたものつまり結果だけに決っており、進化そのもの即ちそうした結果をもたらす行動は我々には扱えぬであろう。……以上が私の目指す生命の哲学である (p. 537)」

ここで生命の哲学の方法論が与えられる。①先ずAを探し出すことが必要である。②次にBを取り出さねばならぬ。③A、B二者が同一実質なることが明らかにされねばならない。④Bに於けるCの《濃縮運動》が語られるべきである。⑤A・BとCとの融合は如何にして可能か、またそこに何が成立するかを述べねばならない。

(3) 証明の原理及び手続き 機械論は未来及び過去を現在の函数として計算できると考え、实在の全体は永遠の中に置かれ、見かけの持続は存しても精神の弱さの故に一挙に知り得ないためであるとす。しかし経験の中で最も異論のない意識にとつては持続は別ものである。持続は溯行不能の流れであり、我々の存在の根底をなし、交渉する事物の実相そのものである。目的論は、实在を既に辿っておいたプログラムを実施することにすぎぬものとするから、時間は無用となりすべては与えられることになる。過去の推進力を未来の牽引力で置き替える「逆さになった機械論」なのである。

これらを超えて進むにはどうするか。ここで本質的な問いに帰るといふ。「機械論の不十分さは事実によって証明できるであろうか (p. 538)」証明のためには進化

(1) 仮説	(2) その帰結	(3) 経験的研究(進化の結果の解釈)	(4) 研究の結果
<p>進化の本質的の原因は、同一の原理である。進化的な原因は、その原因の連続性である。</p>	<p>原因は、結果が多岐に分れて、共通の要素を有する。同一の原理で進化する。原因は、結果が多岐に分れて、共通の要素を有する。同一の原理で進化する。</p>	<p>進化の異なる諸線上に、同一の器官が現れる。進化の異なる諸線上に、同一の器官が現れる。</p>	<p>進化は一連の変異の連続である。進化的な原因は、その原因の連続性である。進化的な原因は、その原因の連続性である。</p>

論の採用が条件となるが、その証明の原理及び手続きは上表の如く考えられる。(4)を当面の目的とし、(3)から出発して(2)でいわれる共通要素を取り出し、仮説(1)の確からしさを増大させようというのである。これは他でもなく進化の結果から進化運動そのものへの溯行である。

### ① 検討の結果

同一の根源的はずみを想定すればそれは進化の諸線上に共通要素を保持するはずであるとして、生物の目の構造の相似に着目して考察は進められる。脊椎動物の目と帆立貝のような軟体動物の目を比較するとき、本質的部分(網膜・角膜・水晶体等)は同じであり、而も両者が共通の幹から分裂したのは帆立貝ほどに複雑な目が現れる以前であったことは議論の余地がない。してみると異った環境下で二者が同じ構造の目を具備するに至るに際して、単に外的環境が押しつける変異が同じように累積されるためには、累積を方向づける「善霊」を想定せねばならぬ。これは機械論の自滅を意味する。

### ② 生命のはずみと進化の発散

生命の根源のはずみが胚の世代から世代へ伝わり、成体は胚の間の連結符である。このはずみこそ進化の根本原因である。視覚への歩みが到達目標を要求するならば目的概念に戻る。「しかし真相は、視覚への歩みは生命の根源のはずみによって行なわれ根源のはずみそのものに含まれている。まさにそのために、独立した進化の諸線上にその歩みを再発見するのである。何故にまた如何にしてその歩みはそこに含まれてい

るか。その問いには、生命は何であるよりも先ずなまの物質 *la matière brute* の働きかけであると答えよう (D. 577)」。働きかけの方向は予定されず偶然性を帯び選択のきざしを含む。選択には行動に先立って行動の種々の可能性が前提されねばならぬ。見る知覚はこの可能性に他ならぬ。してみれば視覚は様々の程度に様々の動物に見出され、同程度に達したところでは同じ構造の複雑さで発見する。

視覚は源のはずみに含まれていた、即ち行動に先行する可能性であった。しかしここに重要な問いが残されていないか。《そのような可能性、更に行動は、如何にして物質に突き入ることができたのか》

発散した進化の諸傾向を取り出し、各線上の出来事の重要度を評価した上で、その諸傾向を結合して「不可分の起動原理 (D. 581)」の模造品を作成することが当面の仕事である。植物と動物を明確に区別する特徴は一つとしてないが、両者は各自が含む性質の割合によって区別される。動物は感受性と覚醒した意識によって、植物は無感覚と眠った意識によって、或る程度定義されるのである。生命の本領は動きそのものに存し、そこには内在する二つの能性 *poussances* が見られる。動物界に於ける生命運動を追跡すると、節足動物と脊椎動物に於いて頂点を示す種が考察される。即ち昆虫特に膜翅類と人間である。本能は前者に於いて最も発達し、後者ほど知性的な動物はない。かくて生命衝動の中に寄り合っていた要素は植物的麻痺・本能・知性であると結論される。

### 第三章 本能と知性

進化の経験的研究で得たものは右の三者である。これから問題とするのは意識の二側面即ち本能と知性である。これはそのまま認識論への移行でもある。

#### ① 行動からの説明

- (1) 本能・知性の暫定的定義 本能と知性は互いに他の痕跡を持ち両者は傾向であるから固定的定義はできぬ。生

命は第一になまの物質から或る種のものを獲得する努力を示すから、二つの心的活動形態は何よりもまず「無生の物質」に対する二通りの働きかけ(φ. 611)である。推理のあるところに知性はある。推理は過去の経験を現在に曲げることであり、これは既に発明の始まりである。発明は物質化して道具に製作されるとき完成する。「……結局知性とはその本来の歩みふりらしいものから見るならば(φ. 613)」「無機の道具を製作し使用する能力である。非知性的動物の所有する道具は使用者の身体の一部であり、本能はこの持つて生まれた道具を利用する自然的能力である。本能は有機化の仕事の延長・完成であり、この仕事と本能との間に明確な線は引けぬ。「……本能とは有機的道具を利用し組み立てさえする能力(φ. 614)」である。

(2) 意識と無意識 「意識がない」という無意識と、なくされた意識から来る無意識は区別されねばならぬ(φ. 617)、という。行為が完全に表象にはまり込むと意識はこぼれ出ないが確かに存在し中和されているにすぎぬ。意識とは行為の表象に対する不十分さを意味し、かくて知性は意識へ本能は無意識へ向うと想定してよいことになる。認識は本能にあっては演じられるもので無意識であり、後者に於ては考えられるもので意識的である。両者の間には「本性よりはむしろ程度の差(φ. 618)」がある。

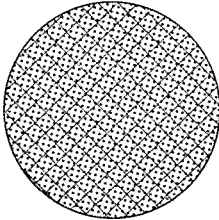
(3) 対象の相違 二者の本質的差異は活動の作用点となる根本的に異った対象にあるという。昆虫の本能は内面化して意識となる代りに的確な歩みとして外化されるが、昆虫は特定の事物が存在する時と所を「学ばずに知っている(φ. 619)」その表象を行動として描く。他方知性は関係の枠を生得している。本能は事物を知性は関係を対象とする。それでは知性に於て行動の不足分としての意識と、関係の認識がどのように結びつくのか。

## ② 認識からの考察

(1) 形式と素材 これらを区別する場合、素材とは「なまの状態の知覚能力によって与えられるもの」であり、形式とは「体系的認識の構成に向ってこれらの素材間に立てられた関係の総体」である(φ. 620)。形式は素材なくして

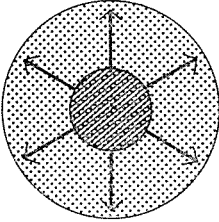


INSTINCT



- action réelle
- conscience annulée (par action réelle)
- connaissance virtuelle (emplie par action réelle)

INTELLIGENCE



- action réelle (avec conscience parfois annulée)
- conscience éveillée (=action virtuelle)
- connaissance

第一認識	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 本能的様式 (定言命題の形をとる)</li> <li>2. 充実した認識であり, 取り出して見せることなく実際の行動の中にもらせる。</li> <li>3. 特定の対象に素材そのものの面で直接に達する。限られた部分にのみ適用される。</li> </ol>
第二認識	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 知性的形式 (仮言命題の形をとる)</li> <li>2. 外的且つ無内容な認識で, 一つの枠に無数の事物が入り込む。</li> <li>3. 特殊な対象には達しない。</li> </ol>

認識の対象となり得る。ただしその認識は所有された物ではなく傾向、注意の方向を意味する。「知性は、その生得的なところについて言えば、形式の認識であり、本能は或る種の素材の認識を含む (p. 621) 」

(2) 二種の認識 生命には様式と方向を別にする

二種の認識 (上図表) が共存して相互透入している。二傾向は「大きく伸びるために分かれねばならなかった (p. 622) 」のであり、本能と知性に達したという。本能の認識と知性の認識との間には、意識の明かさからみれば程度

の差があった。今や根本的な《対象の差》が示された。かくして二様式の認識によって本能と知性は定義されるが、「認識と行動とは同じ一つの能力の二相面にすぎない (p. 622)」もので、認識による定義は行動からの定義を見なおしたものに他ならぬ、というのである。

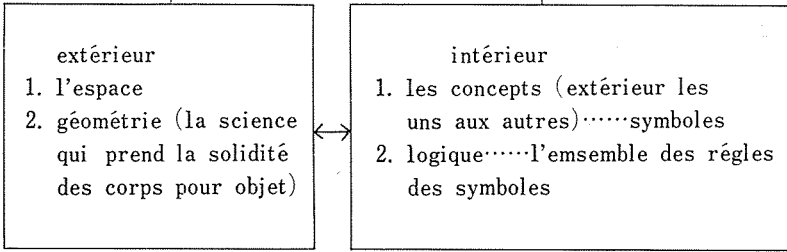
「同じ一つの能力」とは、根本的仮説ともいふべき《無生の物質への生命の働きかけ》とみてよい。これが本能に於ては行動・意識・認識の一つになったものとして働く。知性の場合には、可能的行動が意識であり、認識の基本様式は現実的行動から可能的行動への注意の方向として成立したと考えられる。つまりここで或る推察が成り立たぬか。《行動の不足分》と《関係の認識》が知性に於て原初的に結びつくとすれば、関係は先ず現実的行動と可能的行動との間にたてられたであろう。

### ③ 知性の世界

知性を純粹思弁の能力とみる限りその一般的枠は還元不能の絶対となり他方知性の認識は相対となる。これに対し、「私は人間の知性は行動の必要に依存するものと考える。行動を措定すればそこから知性の形式そのものが導出される。……知性の形式が独立したものでないからこそ認識もそれに依存するものとは最早言えない。認識は知性の産物でなく或る意味で實在の構成部分となる (p. 624)」

では、知性のみには依存しない認識がどんな意味で實在の部分といえるか。ここでも認識論と形而上学の相互連関が問題とされる。ともあれ行動の措定からの知性形式の導出を見よう。①生命は先ず物質への働きかけである（行動の根本的措定）。②この能力の一面は無機の道具の製作に向う。③無数の事物上に拡がる有限な言語の可能性によって觀念へ移る道が内に開かれた。④そこに成立するのは固体の考察から生じた記号の世界であるから、物の固體性を扱う幾何学に於いて知性は勝ち誇る。⑤外の物質を自由な裁断縫合を許す素材とする能力は空間によって与えられる。⑥知性の内的世界は記号の世界、外的世界は空間の世界である。

LE MONDE INTELLIGIBLE



「諸概念は一つになって『知性の世界』を構成する (p. 631)」が、外にもその世界を考え得るのではないか。空間は外に踏み出す知性の原動力として「精神の積極的行為 (p. 626)」——知性的、積極的であろう——の底に常に潜在することになろう。

④ 本能の本性

原初の本能はありのままには生命過程であり、本能は「自分自身と共感する一つの全体 (p. 637)」であるから、生命の真相を語る。

(1) 本能・知性間の根本的不調和 本能と知性は同一原理が二方向に分化発展したもので、前者は自己に閉じこもり後者は無生の物質の操作に没頭する。かかる隔絶は「根本的不調和を証拠だて、知性が本能を吸収することの不可能を示すものであらぬ (p. 637)」

(2) 直観の定義 知性は対象を外から無数の眺めに写し取って自己のうちへ引き入れるが、直観は我々を生命の内部へ直接連れて行く。「但し直観というのは、利害から自由になり、自己を意識し、対象を反省してその範囲をとめどなく拡大できるようになった本能である (p. 646)」

ところが本能はどうであったか。①元來利害のあるものには働かない、②意識は無くされている、③対象から帰還しない、④働く範囲は限られている。直観の要求するところはすべて知性の領分ではないのか。もしそうであるなら、本能・知性間の根本的不調和を如何にして超え直観を成り立たせるのか。

(3) 直観の可能性 直観の努力が不可能でないことは人間に美的能力のあること

から既に示されるという。とは言え芸術家の美的直観は個物に行きつくのみである。「生命一般を対象に選ぶ (p. 645)」ときはどうなるか。

(i) 先ず《直観の位置》がみられる。「知性は相変らず明かるい核をなし、本能は広くなり純化されて直観になつたとはいえ、その周囲におぼろな曇りを作っているにすぎぬ (p. 646)」

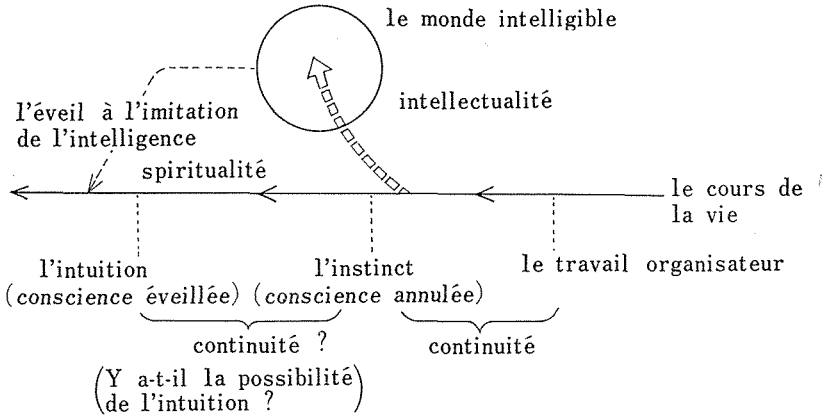
(ii) 本能は知性を補い知性のみによる認識の不十分さを我々に気づかせ、それを補う手段を垣間見させる。

(iii) 感情の現象や反省を伴わぬ共感反感に於て、昆虫が本能的行動をする際にその意識内に起っているに違いないものを、我々は幾らか体験する。

(iv) 知性を超える直観の衝力は知性から来る。「知性なくしてはいつまでも本能の形でいて、自分に実用上かかわりのある特殊な事物に釘づけされ、それらの事物によって外化されたまま場所運動を続けるであろう (p. 646)」

本能と知性との間の根本的不調和とは、充実と空虚、相互透入と相互疎外、動と不動、持続と空間の間の不調和なのである。これは知性から向う限り超えられない。しかし第一のものは超えられるのではないか。つまり本能は《意識の覚醒》を知性に見習うのである。動きながらの覚醒は、生命性の延長を歩むことであり異物の投入にはなるまい。直観の可能性はそこに開かれる。「本能は知性の領域に入らぬからといって精神の領域に位しないわけではない」(p. 643) 生命は自己の本道たる *spiritualité* を離れて *intellectualité* に向うとき別の世界を形成する。しかしその世界は精神性から完全に隔絶されたものであるか。現に直観はその衝力を知性から得るのではないか。而も本能の覚醒というとき、本能に知性の覚醒を並べておくような安易な手順で直観は成立するか。直観の成立過程は未だ十分に解明されていないのであるが、認識の素材は知覚によって与えられ、知覚の器官は生命過程の産物であり、器官形成の延長が本能であるとするとき、認識は本能を欠いては成り立つまい。

##### ⑤ 意識の自己限定と解放



「様々の行動がもつれ合うことこそ閉じこめられた意識が自己を解放する唯一の道である (p. 647)」から、意識は行動の道具でなくて原因である。生命即ち物質の中を投げられて通る意識は、自分の運動かさもなくば自分の通過する物質に注意を固定し、意識は直観と知性の二方向をとった。直観は外皮に締めつけられて本能に縮小し、「自己を限定して知性となる場合 (p. 649)」は対象の領域を拡大した。「意識は一度解放されてしまえば、自分の中に折り返して自分の中に眠っている様々な直観の潜在力を目覚めさせることができるものである (p. 650)」

《限定》は本能にも知性にも施された。解放は直観に於てのみ言い得る。縮小した本能から直観へ復帰するには、単に対象の範囲を拡大するだけでは不可能と考えられる。

#### 第四章 知性と物質

##### ① 研究の目標と方法

本能と知性は共に唯一の地下から浮き出たもので、これを意識一般 *la conscience en général* (p. 653) と呼んでよい。ところで知性の大筋はすべて物質に対する我々の働きかけの

一般形式を描いているので、知性・物質両者の発生を追跡することは相関的であるという。「知性らしきと物質らしきは相互に適應しながら、それぞれの細部まで作り上げたのだらう。両者は一層広くて高い存在形式から出たのであらう (p. 653)」かくてこれからの研究目標は《知性・物質の、より高い存在形式からの発生と、両者の相互適應による成立を明らかにすること》である。他方、知性が知性を超えた意識に入っていく際、先ず知性的なものを頼りとせぬわけにはいかぬ。しかし固体的知性がそれより広い流体から凝縮した核であるとするならば、再び流体に溶け込めぬはずはないといわれるのである、「我々の思考が飛躍を決定した場合 (p. 655)」に方法が開かれるのである。

## ② 科学と哲学

(1) 科学的認識と哲学的認識 事実の考察を実証科学に任せれば、哲学者は科学者から事実と法則を受け取り、それらの奥にある原因に達しようとするか、科学的認識そのものによってそれらを超え得ぬことを証明するかである。しかしこの分業は一切を混乱させる、という。形而上学ないし認識批判は科学の記述や分析の中に含まれ、それを哲学者は出来上ったものとして受容することになる、つまり科学が実在に対してとる態度そのものによって不整合な形而上学・認識批判を定式化する他はないのである。科学の狙いは働くことにしかなく、働くには無生の物質を介する以外に方法はないから、あらゆる実在をその相面から見ると。生命や心理の現象までも科学に委ねるなら、哲学は自然全体の機械論的把握をア・プリオリに容認し、そのことが物質的必要から出たことを問わなくなる。哲学は認識及び自然の抽象的一元性を受け入れることになるのである。知性は生物も無生の物質も共に知性のカテゴリーを用いて捉え、そのときに得られる成果に区別はないとするところに独断が成立する。他方、無生の物質は知性の枠に合うが生命はその本性を分離しないと枠に入らぬところから、枠に入っているものまでも疑う懷疑が芽生えるのである。

(2) 真の一元性への道 独断論の偏見を正すには生命の領域に向う態度及び手順を明らかにし、懷疑論の誤解を解くには生の本質を回復させると共に知性と物質の結合を示すことが必要であると考えられる。知性の作りものの一元

性を捨てて「内的で生きた真の一元性 (p. 664)」へ向う途上に、いわば《暫定的二元性》が採用される。「物質は知性に調子を合わせていて両者の間には明らかな一致があるのだから、一方の発生を見るためにはどうしても他方の生成を辿らぬわけにはいかぬ。両者を共に含んだ素材から、同じ一つの過程が両者をいちどきに裁断したに違いない (p. 664)」このような素材と過程の解明によって暫定的二元性の一半が見られ、これまで或る程度明らかにされた直観と生命の問題が他の一半を担うことになるう。

知性はそれより広い意識から濃縮した核であった。してみると知性・物質共にそこから裁断された素材は、そのような意識であろう。これが露わにされたとき我々は初めて真の一元性に触れるのではなからうか。

### ③ 持続の立場からの考察

物質は無持続ではないが、物理的存在は弛緩の方向へ、心的存在は緊張の方向へ傾くと想定してよく、この仮定の正しさは物を持続の立場からだけでなく拡がりの見地から見るときも確かめられるという。

(1) 物質・知性に関する仮説及び帰結 我々は弛緩の極限に於て絶えず新たに始まる現在で出来た存在を垣間見ることが、拡りの方向へは数歩を踏み出すのみである。ところでしばらくの間、「物質は更に先へ進められたその同じ運動に存し、物理的なものは心的なものに逆転したものである (p. 666)」と仮定すれば、次のことがわかるといふ。

(i) 精神は物質に暗示されて一層判明に空間を表象するや否や、空間内で自然にふるまう。精神はこのような空間を暗々裏の表象 *la representation implicite* として、起るかも知れぬ弛緩即ち可能的拡がりから受ける感じそのものの中に、孕んでいた。

(ii) 物質は精神の眼で眺められるとき、いよいよ物質性を強める。

(iii) 物質は精神に衝動を与えて物質まで下降させた。精神は更に進んで空間の図式にまで到達した。精神の作る純粹空間の表象は、そうした運動が行きつくはずの終端を図式にしたものにすぎない。

認 識 論	1. 精神が物を見習う。 2. 物が精神を見習う。 3. 精神と物との間に神秘的照合を想定する。 ----- 4. 知性は精神の特殊な一機能で本質上無生の物質に向けられる。知性と物質は一方が他方に自分の型を押しつけるのでもなく、両者間に予定調和があるのでなく、両者は互いに漸進的に適合して一つの共通形式に落ちついたものである、とする。
-------------	---

(iv) 空間の図式が一度獲得されると、精神はこれを網の目として物質を把握する。ところで認識論には第四の場合の選択が可能であるという(上表)。この相互適応は「ごく自然に遂行されたのであろう。何故なら同じ運動の同じ反転から、精神の知性面と物の物質面が一度に創り出されるからである(p. 670)」この見地からは知覚と科学が物質についてもつ知識は近似的であるが相対的ではない。但し知覚は実際的要求に左右されすぎるので、また科学は数学的形式によって物質の空間性を強めすぎるので、共に改作を要する。科学は原理としては無生の物質を領域とする限り「実在そのものに手が届く(p. 670)」のである。

(2) 問題点 以上の考察から生じた幾つかの問題を整理してみよう。

(i) 「同一運動の同一反転」とは何を意味するのか。

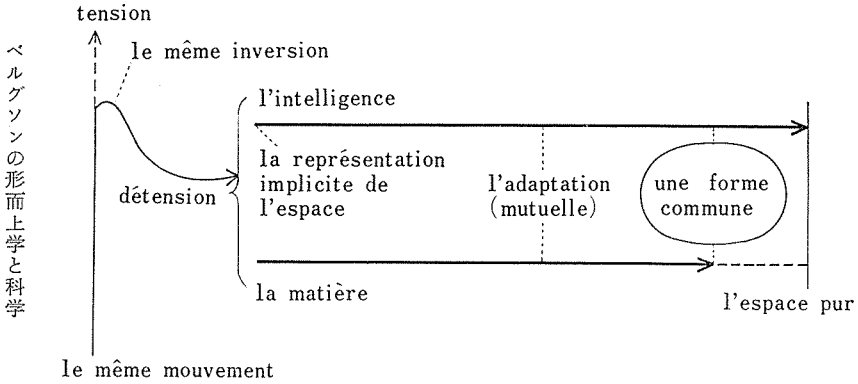
(ii) 知性・物質間の自然な相互適応とはどんなことか。

(iii) 相互適応の末に落ち着く共通形式とは何か。空間ではない、何故なら物質は「空間の中に拡がりきってはいない(p. 667)」からである。ここで、言わば科学の形

而上学の間ともいふべきこの共通形式を探し出すことが問題となる。このことはカントに反して「空間性の度合い(p. 669)」を区別することにかかわり、物質の空間性を強めすぎない科学が収斂すべき場所を示すことにもなる。

科学の物質認識を相対的でなく近似的というのは、この《共通形式》と《純粹空間》の間で言われることではないか。「慎重に分析を進めて思考のカテゴリを決めるだけでなく、カテゴリを産み出すことが問題なのである(p. 671)」というとき、カテゴリが決められるのは既に純粹空間にまで下降した知性の自己展開を反省することによってである。またカテゴリ産出の問題とは、純粹空間にまで下降する精神の運動を追跡することであろう。実際後に見る





ベルグソンの形而上学と科学

のように、精神は純粹空間への途上では何もしないで終点で一挙に知性となりカテゴリーを展開した、というわけではない。カテゴリーの萌芽を孕んでいたのである。

④ 拡がりの見地からの考察

(1) 意識・物質・空間 意識の弛緩運動を辿れば自我は疎外し合う思い出に拡散し、意識はこの運動が極限まで続く可能性を我々に垣間見させるが意識は実際そこまでは行かぬ。逆に物質を熟視すれば、空間に合致して見えた物質は注意の集中により相互透入する。かくして物質は空間の方向に展開はしても完全にそこに至りはしない。「そこから次のように結論できる。意識は我々の中でその運動が生まれかかる状態を素描できたが、物質はその運動をはるか遠くまで続けさせるに過ぎない。してみると我々は鎖の中間の環は把握していないが、鎖の両端は押さえている(p. 171)」

意識の弛緩の開始点と空間に合致して見える物質とを鎖の両端とするのであろうが、両者が一つの鎖の両端であるためには、意識の弛緩運動と物質のいわば浮上運動とが同一線上に行われねばなるまい。その保証はどこからくるか。而もこのような考察は我々が欲するときを為し得る、いわば《意識と物質の個体発生》である。他方知性と物質は相互適応によって作り上げられたとすると、《系統

《發生》を語ることが出来よう。意識は自己が限定されて知性となった歴史を、そのたびごとの弛緩運動に於て再演するのであるか。

(2) 意識の拡がりとは物質 一つの詩を緊張して把握すれば詩人の単一な気分を体験できるが、注意がゆるめば意味の中の音が「物質らしくなって」現れる。句は語に、語はシラブルに割れ、更に各文字が想像の紙の上を練り歩く。この拡がりとは意欲の欠如を表現するに過ぎぬ。「このような比較から、或る程度次のように言える。積極的実在の同じ抑圧、つまり或る根元的運動の同じ反転が、空間に於ける拡がりとは、数学がそこに見出す見事な秩序とを一どきを作り出す有様がわかる(p. 673)」

意識の拡散は、詩が文字に割れたように物質の拡がりとなるのか。

##### ⑤ 知性の生成と操作

知性の全操作は幾何を完成目標として進む。けれども「それらの操作は空間を再構成するまでには決して至らず空間を所与とする他ないから、幾何は必然的に前提される。従って我々の知性の原動力となり知性を前進させるのは、空間表象に内在する密かな幾何である(p. 674)」右のことは知性の本質的二機能たる演繹と帰納とを考察すれば納得されるという。知性が作動するとき空間は常に所与であり、操作は密かな幾何から幾何への運動といえよう。他方知性の生成過程もあったはずであるから、知性の生成と既得の知性の行う操作とを区別して眺める態度が許されよう。

(1) 演繹と帰納 二角の等しい三角形は二等辺三角形であるということは、幾何学を学ぶ前から知られていた。その明晰さと自明さが他の演繹を超えるところの自然幾何 *une géométrie naturelle* が幾何学 *la géométrie savante* に先行する(p. 674)。更に①位置及び大きさの問題は、外化されて行動となった知性 *l'intelligence extériorisée en action* が反省的知性 *l'intelligence réfléchie* の出現以前に既に解決する。②未開人は文明人よりも距離を見積り方向を定める業にたけている。③動物があらわに演繹せず概念を作らないならば等質空間も持たぬ筈である。従って等質

空間を所与とするなら同時に必ず潜在幾何 *une géométrie virtuelle* (p. 975) を導入することになる。

本来の帰納は、実在は系に分割され系は孤立したものと考えるを含むところの、因果法則の信仰の上に成立する。コンロにかかった鍋の水が今日も沸騰するであろうということは、二辺夾角の決った三角形の第三辺が定まると同じ理由で行われるであろうということである。かくて帰納に於ては時間は無視される。これは幾何の場合に限られる。幾何は帰納に於てもまた理想的極限である。

(2) 知性の生成と操作 自然幾何は潜在幾何ではない、何故なら前者は知性の生成途上にあり後者は空間を所与とする既得の知性が密かに帯びるものであろうから。演繹に於て考察した諸点は、反省的知性成立以前の行動の知性が自然幾何を持つことを意味するであろう。「知性の見地からは、空間から幾何を、幾何そのものから論理を、自動的に生じさせることは前件先取の誤りがあるとしても、反対に若し空間が精神の弛緩運動の終端であるとするならばどうなるか。空間を所与とできるためには、純粋な空間直観がその終端となるところの軌道上に存する論理及び幾何が、どうしても立てられねばならぬ (p. 666) 」

このような弛緩運動を知性の生成過程と解すれば、所与としての空間は終点にある空間である。空間が幾何を生み幾何から論理が出てその結果空間が所与となる、とするのは知性的には誤りであると思われる。では幾何と論理を産出した初めの空間はどんなものであったか。「精神は物質に暗示されて一層判明に空間を表象するや否や、空間内でも心安らかに感じ、いとも自然に動きまわる。そのような空間を精神は暗々裡の表象として、自分の身に起るかも知れぬゆるみ即ち可能的拡がりから受ける感じそのものの中に孕んでいた。精神は物の中に空間を再発見するが、若し精神に十分な想像力があって自分の自然な運動の逆転を終端まで推進できたなら、物はなくても精神は空間を手できたであろう (p. 666) 」精神は、自分自身だけが弛緩さえすれば持ち得るような、暗々裡の表象としての空間を看取していた。知性の生成は、そこから出て自然幾何・自然論理を形成し、「純粋な空間直観」へ到達する過程であ

ると言つてよいのではないか。この運動を開発する一つの触媒として物質が存した。だが純粹空間を手にした知性の源泉は、物はなくても自力で空間まで達したかも知れぬ精神に存したのである。

ひとたび得られた知性はどんな操作をするのか。空間表象に内在する密かな幾何を携えてこれを物質に押し当て、幾何の秩序通りに物質を分割する。つまり知性は「物」を得る。萌芽期の知性は暗々裡の表象としての空間を携えて行動の必要から位置・大きさを問題として物質を処理した。けれども如何にして知性はともかくもそこまで到達したのか。この問いは《知性・物質間の相互適応》の何たるかを尋ねることにもなると考えられる。

### ⑥ 数学的秩序と物質

(1) 実在の中断・反転 空間への運動は精神の中に知性を、物の中に秩序を作り出すが、実在全体は不可分であり創造への歩みであるときと見るときは物の姿は一変する。「物質的要素の複雑化とそれを結合する数学的秩序は、実在全体の懐に部分的中断乃至反転が起こるや否や、自動的に現れるに違いない(p. 670)」知性はその同じ過程で精神内に切り取られたから、物質の複雑さと秩序に一致し自分を再発見するといふのである。しかしまさにそのような中断・反転とはどんなものであろうか。

(2) 物質及び数学的秩序に関する仮説 科学者は或る変数を独立させ測定単位を適用して物理法則を作るから客観的実在性を具備しない。とは言え物質にも客観的近似的な数学的秩序は内在する、何故なら「物質とは無延長から延長への、従つて自由から必然への弛緩だとするなら、純粹な等質空間に全く一致することはないにしても、そこに導く運動によつて構成されたものには違いない。してみると物質は幾何へ向う途上にある(p. 680)」

ここにもまた既に見た仮説と帰結が語られている。仮説——精神は弛緩運動の末に純粹空間に達し、物質もまた同一の運動を行っている。帰結——従つて同一の道筋に於て、途上にある物質の秩序と終端にある幾何の秩序とは近似的である。ところで物質と数学的秩序に関する仮説で、真らしいものは一つしかないという。①物質が独立に数学的

秩序を持つなら、我々が偶然それに邂逅するというのは何とも考え難い。②物質が知性の枠を全然受けつけないなら、科学の成功という事実の説明がつかぬ。③それ故我々の枠であつて物質にも適合するものが想定されねばならぬ。或る流れの中断から自動的に知性物質両者の枠が産出されるなら原因の同一（枠の成立）から結果の同一（両者の近似性）が説明される。何よりも中断の解明が待たれる。

(3) 秩序と無秩序 数学的秩序は秩序たる限り何か積極的なものを含む筈であり、秩序は全く存在しないかも知れぬし、物の数学的秩序は無秩序の征服だから積極的實在性を持つ……このような考えは依然として根強いという。「一般に、實在はそれが我々の思考を満足させる度合いに正確に比例して秩序づけられる。つまり秩序とは主体客体間の或る和合である、それは物の中に自己を再発見している精神である(p. 282) 精神は相反する二方向へ進む。第一の方向は緊張の形をとつた不断の創造・自由な活動である。第二は幾何仕掛けに向う。いずれに於ても精神は自己を再発見するからそこには秩序がある。第一のものは「生きもの乃至意志されたものの秩序」であり、第二の「無生と自動の秩序」に対立する(p. 283)。無秩序を口にするとき精神は期待した秩序とは別の秩序に直面しているに過ぎない。物理世界が最早法則に従わぬカオスの表象を我々が持つと言ふとき、真相は次の如くである。我々の意志は自己を客体化して一々の意志となり、同を同じ結果を原因に結びつけぬようにし、それらの要素意欲の上に一つの単一な志向を置く。カオスとは意志された秩序が現にあることである。先ず不統一なものがあり、次に幾何的なものがあり、更に生命的なものがあるわけではなく、幾何の秩序と生命の秩序があるだけである。両者間を精神が動揺して無秩序の観念は成立するのである。

### ⑦ 「反転そのもの」物質の生成

これまでの分析は「實在が如何にして反転という仕方緊張から弛緩へ、自由から必然へと移るかを示すために必要であつた(p. 296)」という。分析はどんなものであつたか。

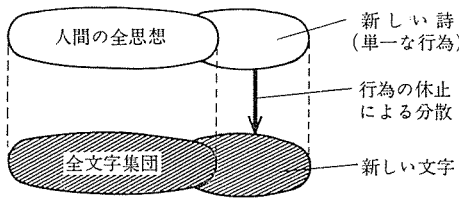
- (i) 緊張・弛緩二項の間の關係は意識と感覺經驗によって示される、ということ成り立たせる。
- (ii) 幾何の秩序は反対の秩序の純粹單純な抑圧であつて説明を要しないことを明らかにする。更に抑圧とは置換であり置換と解する他ないことを示す。

(i)は持続及び拡がりの見地からの考察として見たが、意識の拡がりとは物質の拡がりとの間に問題を残す。(ii)は説明を要しないか。意識は自己を抑圧して弛緩さえすれば空間に達するとしても、幾何の秩序を受容する物質の出所が不明である。これまでは反転からの帰結が示されたが、「今やその反転を吟味せねばならぬ」(p. 696)とこゝろへ来た。「弛緩するだけで拡がる原理とは何か。そこでは原因の阻止が結果の逆転と等価になっているか」(p. 696)「原因の阻止を究明することに於て知性物質が共に産出される有様があらわにならう。結果の逆転とは、空間に達した知性と物質そのものとの反省であらう。

「原理」は意識と呼ばれる。それは我々の個々の減衰した意識ではない。我々の意識がいくらかでも自分の原理に合致するには、出来上つたものを離れ出来つつあるものに則る必要がある、見る能力が自分自身に向き直り意志、する行為と一つにならねばならぬ」(p. 696)。

(1) 形態の創造と物質の創造 我々が自己の存在を意欲に置きもどし、意欲を衝動の中に置くととき、實在は不斷の増大であり果しなく続く創造であることがわかるという。「……尤もそれらは形態の創造以上のものではない。それ以外のものであるわけではない」(p. 698)「我々は生きた流れそのものでなく既に物質を担って凝縮したその部分である。我々は素材の單純な寄せ集めからは得られないものを創造しようとするがやはりそこには諸要素が先在し後まで生き残る。「しかし形態を生む活動の單なる停止が形態の素材を構成し得るものとすれば、素材の創造は理解も容認もできぬものではなくなるであらう(芸術家の描く獨創的な線はそれ自身既に運動の固定であり言わば凝結でもあるのではないか)。何故なら我々は形態創造を内側から把握し不斷にそれを生きている。そして他でもない、形態が純粹で

	A	B
1	今日までに書かれたアルファベットの全文字を考えてみよう。新しい詩を作るために別の文字が現れて今までのものに加わるだろうとは思われない。	物質的宇宙を或る与えられた瞬間に構成しているアトムの数が増すということは我々の精神の習慣に合わぬし、経験にも矛盾する。
2	しかし詩人がその詩を製作し、人間の思想がそれだけ富んだ、ということは実によくわかる。	けれども秩序のまるで別な実在がありこれが詩人の思想がアルファベットの文字を取捨するようにアトムを取捨して、唐突な附加によって増大する、ということは容認されなくてはならない。
3	こうした創造は精神の単一行為であり、行動が続いて新しい創造に入る代りに休止すると、それだけでその行動は散らばって語になり、語は文字に分かれ、文字はこれまで世界にあった一切の文字に加わる。	その際この附加物は裏を返せばいずれこの世界であってよい並置として記号的に表象するものである。



創造の流れが一瞬阻止される場合に、形態の創造は物質の創造になるのであるう (p. 698) ]

画家の一筆によってこれまで世界に存在しなかった一線が描かれたとすると、形態は創造された。クレヨン、画布等の先在する諸要素から素材は確かに構成された。しかし何故そのことが素材の創造になるのか。ここで或る比喩とそれの意味する創造が語られる (p. 698 ~ p. 699)。これを左の表に対比して考察しよう。

先ずAの吟味から始める。①ピエールの書いた詩に用いられたaとジャンの使ったaとは、二人が別人であるほどに異なるものとするのか。②それとも二人は全く同一の文字aを使ったというのか。図表の1と考えるなら②と見做さねばなるまい。ところが新しい詩は単一でありその行為の停止によって自分が分解して文字となったのである。これらの文字が過去の全文字に附加されるといふとき、前者は後者と別でなければならぬ。すると①をとらねばならぬ。してみると新しい詩は文字集団から要素を取り寄せたのではない。ひるがえって同じように考えるならば、過去の全文字集団に於ける各文字もまたこれまでの人間の全思

区 別	秩 序	創 造
l'univers matériel	幾何に近似する秩序	生命の創造活動から独立した物質の創造は如何？
両者間に生ずる問題		<p>詩が分散して文字となったように、質料は附加されていくのか？</p> <p>無生の物質は、特に芸術家の仕事の如き場合、先在するのではないか？</p>
une réalité d'un tout autre ordre (l'univers vital ?)	生命の秩序	<p>— 形態の創造 — 質料の創造</p> <p>1. 生物体の創造 2. 無生の物質への働きかけ (芸術家の仕事など)</p>

RÉALITÉ

想の影に過ぎぬはずである。そこにある幾つかの a は皆個性的で互いに別である。共有されるイデアのような文字を考えてはなるまい。かくすれば文字は創造されたのである、更に適当な表現をすれば創造活動の或る固定的眺めである。

次に B を見る。いま世界は牛・馬・羊から成ると考え、そこに新しく犬が生まれ出たとしよう。新たな詩の創作によって思想が富んだように形態が創造され、世界はそれだけ豊かになった。犬を形成する物質が全アトムの集団から採用されたのなら、質料は創造されずアトムが転位しただけである。質料の創造を語るためには、文字が詩からの分散であるように、質料が形態と一つであって創造活動の停止によって両者共に出現せねばならない。独立した質料を考えることは後で行う単なる眺めといわねばなるまい。全アトムの不変的成員から成る物質



という宇宙観もそのとき自ずと破壊されよう。

物質及び知性に幾何の秩序を語るとき、それは生命の秩序の単なる抑圧から生じるといふ。それは「ただの眺め」なのか。若しそうならば幾何の秩序は知性の迷妄乃至恣意から生ずるものとなる。抑圧するのは哲学者にとって悪しき業となり、二つの秩序は同格に並ぶわけにはいかぬ。いわば生命的一元論である。知性の認識の如何にかかわらず物質の秩序は生命の秩序とは別の *réalité* であると認めるなら、両者の並存に不都合はない。或る二元論が姿を現す。ここで先に見た《暫定的二元性》を見直さねばならぬ。唯一の實在があつてこれを真の眼で見るときは一元性となるなら、その二元性は文字どおり暫定的でしかなかったことになる。他方、生命の領域と無生の物質の領域が共により高い存在形式から出たことが確立され、而も両領域が最後まで存続するなら、最早それは暫定的ではなくなり、自己の基底を与えられた上で、實在の二分肢の一つとして生き残る。科学はおそらくこの場合にのみ拠点を確保するであろう。

(2) 抽象的延長と物質 先ず抽象的に拡がり一般を考察すると、拡がりは専ら中断した緊張 *une tension qui s'interrrompt* として現れる。次にこの拡がりを満たす具体的實在 *la réalité concrète* に身を寄せてみる。そこを支配し自然法則となつて姿を現す秩序は、反対の秩序が抑圧されるときに自ずと生まれた筈の秩序である。意欲の弛緩がまさにその秩序を生じさせるであろう。最後に、その實在が進む方向は、今や我々に解体する物の觀念 *l'idée d'une chose qui se défait* を暗示する。そこに物質性の本質的特徴の一つがあることは疑いない。ここから結論される。そうした物が出来上る過程 *le processus par lequel cette chose se fait* は物質とは反対向きに進み、その過程は定義そのものから非物質的である。

抽象的延長がそこから出るところの「中断した緊張」とは、何が中断することを指すのか。我々の意識の中断か。その延長を満たす「具体的實在」はどこから来たのか。「秩序とは主体客体間の或る和合である。秩序とは具体的実

在の中に自分を再発見している精神である」これにならって言えねばなるまい——《延長とは主体客体間の或る和合である。それは具体的実在の中に自分を再発見している精神である》何故なら、(具体的実在を物質と解してよいならば)物質と知性は一どきに何かから産み出されたからである。しかし精神は弛緩によっては物質を産出したのではなくてそれを見て、いる、だけではいけないのか。

(3) 生物体の考察 右で見た結論は、物質の内部に入り込めば、即ち生物体を考察すれば、更に強く承認を迫るであらうという。生命には物理変化の停止や逆転の力はないが、その歩みは遅らせ得る。全生命は植物の葉緑素機能に依存する、つまり生命を分裂以前の衝力として見るなら、それは何かを貯蔵する傾向であった。今腕を上げる動作を考える。腕は放置すれば落下するが、腕の中に或る意欲的なものが存続して腕を生命づけながら持ち上げようと努力するものと想定する。このように、解体しつつ創造する動作 *un geste créateur qui se défait* というイメージを描くなら、相当精密な物質表象を得る。そのとき我々は生命活動の中に解体する実在を貫いて出来上っていく実在 *une réalité qui se fait à travers celle qui se défait* (p. 705) を見<sup>19</sup>。

(4) 我々の世界の考察 我々の世界を見ると「このしっかりと結ばれた全体の敲しく決定された自動的進化は解体する行動であり、生命がそこに切り取る予見不能の形態は、それ自身伸びて思いもかけぬ運動になり得るもので、出来る運動を表現してゐる (p. 706)」

我々の物質界は解体運動であり、これを進化と呼ぶからには不断に更新されているものに違いない。そこに逆向きの生命が流入するとき生物体が生じる。生命は生物体となるとき自分の流れを中断さえすれば形態質料共に創造し得たのか、それとも先在する物質に便乗したのか。「物質は無延長から延長へのゆるみである (p. 680)」と解するとき、その無延長とは何か。物質は逆方向の運動の阻害から出たのなら、無延長はその運動であろう。ではどのようにしてそこから延長が出たのか。

(5) 諸々の世界の考察 他の世界も我々の世界と似ており物はそこでも同じように経過すると信じられる点が多く、諸世界が同時に形成されたのでないことも知られている。そこで行動は解体するにせよ出来上るにせよ至る所で同じ種類の行動が為されているとするならば、専らそのありそうな相似を次のように表現できるといふ。「或る中心があつて、そこから諸世界が巨大な火花からの火矢のように噴出する。ただしここで立てる中心とは物ではなく噴出の連続のことである (p. 706)」

(6) 知性と物 創造も右のように解すれば神秘でなくなるという。創造を考える際に創造される物や創造する物を立てると一切が闇に包まれる。「ありのままには、生命は運動であり物質性はそれと逆の運動である。二つの運動は各々単一である。一つの世界を形成する物質は不可分の流れであるし、物質を貫いてそこに生物体を切り取る生命もまた不可分の流れである。二つの流れのうちで物質は生命に逆らうが、生命はそれでも物質から何かを取得する。両者間に或る生存方式が生じ、これがまさに有機組織である (p. 707)」

増大する行動の流れを知性が切断するとき物 chose が出来上るのであつて、知性の構成物以外に物などありはしない、という。物質を固定的な物質粒子から成るとすれば、物を形成する前に物質粒子という物を立てるといふ矛盾が起こるのであらう。更に、生物の形態を組織してきた活動に於て、「或る深遠な知識がその仕事をしているなら、質料なき形相の形相なき質料に対する作用は如何に解すればよいのか (p. 707)」静的な物質粒子の上に静的な外部原因が巧みな有機組織をかぶせるとするから、そうした困難が生じるというのである。では物の前に物を立てるのを止めて、物質という流れを見よう。先ず物は知性の構成によつて成立するといふことを考えてみる。知性は自分に備わつた等質空間及びそれに内在する幾何を一方的に流れに押しつけて物を得るのであらうか。そうならば、物質・知性が相互適応によつて互いを作り上げたといふ考えは意義を持たなくなる。つまり物質の正体そのものが変質したのではなく、知性は自分の構成力をより強力にしただけで、物質は依然として知性の構成に無縁な流れのままだったのか。

そうならば物の破壊は容易であるしまた正当である。而もなおここで物質と幾何の秩序とは近似的であるというためには、物質もまた自らの歩みを物の方向へ進めておらねばならぬ。形相質料の合体論及び物の觀念は、知性が自分の方からのみ物質を見るとき発生するのである。知性は物質の一側面に自己を発見して《物を構成したのだ》と思うのである。物は知性の構成によるというよりは、不十分な物質の把握ではなかるうか。

次に、生命・物質間に如何にして「生存方式」が成立したのかを問うことができる。これは、形相質料の合体を「如何に解すればよいのか」という問いと同じ重みを持たないか。唐突に二つの流れの合流を説くことは、知性が一方的に作り出したような顔をする「物」の成立と同じ程に不可解ではないのか。

## 第五章 進化の再考察

生命・物質という二つの単一な流れの間に生じた或る生存方式が生物体である。この観点から見ると生命進化の一般的考察は光を投げられる。生命全体の本質は、エネルギーを蓄積して放出し、変形可能の溝を流れさせその端で非常に多様な仕事をさせる努力である。生命のはずみはこの成果を一挙に得られず、一個の有機体がエネルギーの漸進的蓄積とその急激な使用とを均等に果すのは荷が重すぎた。かくて有機体は根源のはずみを含む二傾向と物質の抵抗の結果として、植物・動物に分裂した。生命はありのままには心的なもので、心的なものは相互透入する多数の項を渾然と包みこむ本性を持つ。生命が分岐するのは互いに疎外されるから、即ち空間化されるからである。個体化は生命自体に宿るものの結果であり、また物質の仕業でもある。

### Ⅰ 「超意識」と個々の意識

「我々の分析が正確であるなら、生命の根元にあるのは意識である、或いは超意識 *la suprac conscience* という方がよい。意識、つまり超意識は火矢 *la fusée* であり、その消えた破片が落ちて物質となる。意識はなお火矢そのも

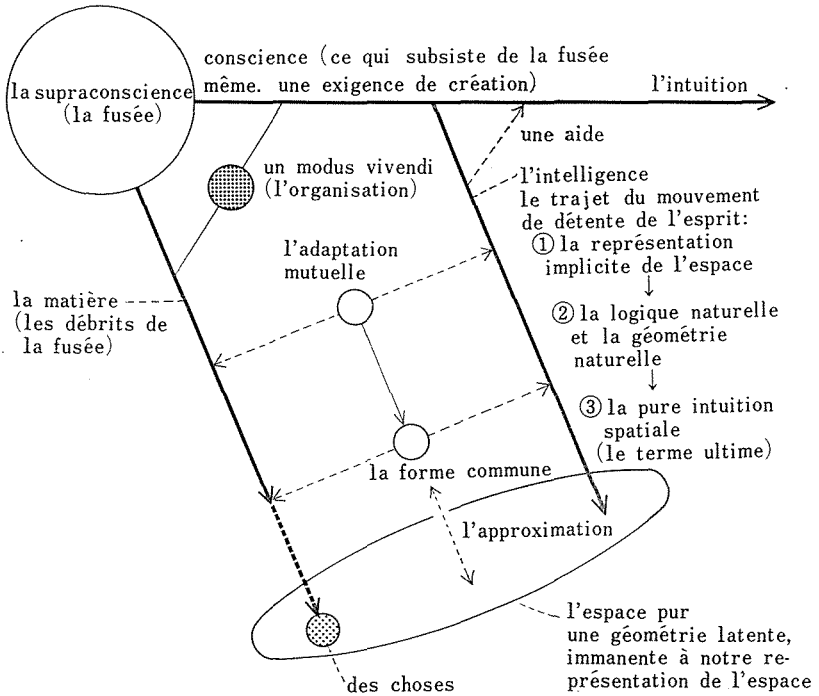
のが存続しているものである。意識は消えた破片を貫き、これを照らして有機体とする。しかし意識は創造の要求 *une exigence de création* であり、創造が可能な場合でなければ意識自身に対して明らかにならない。生命が自動仕掛に封じ込まれているときは意識は眠っていて、選択可能性が甦るや否や目覚める (p. 716) ]

超意識は物質を担った我々の意識ではない。「弛緩さえすればそれだけで拡がる原理 (p. 666) ] は今や超意識と呼ばれる。見る能力としては、我々が弛緩に於て捉えるものは物質の拡がりである。そこに自己を再発見すると公言する意識は、自分が超意識の存続であることを自覚していなければならぬ。自覚を中断して立ち止ったときに行う認識は意識の消極的結果であるから、意識の——従ってまた実在の部分である。《如何にして意識は超意識に達し得るか》の問いは発すべくもない、おそらく設問の方向が逆であろう。自ら持続することに於て、我々は自己の原理に幾分なりとも合致できるのであろうか。

個々の意識としての我々はどうなるのか。生物体となった生命のあり方は創造かさなければ自動仕掛けである。意識は目覚めるか眠るかしかない。創造可能の場合にのみ意識は覚醒し、生命が自動仕掛に身を委ねるとき意識は眠り込む。選択可能の場合に意識は光をとりもどす。してみると意識の覚醒とは創造可能であり、創造可能とは選択可能に他ならぬ。何を選択するか。先ず物質を選択して自己の身体を形成し、次に物質の流れを遅らせること、つまりエネルギーの蓄積を行った。最後にこのエネルギーを「思いもかけぬ方向」に費すのである。これらは自動的秩序に意志された秩序を重ね、行動の創造を目論むことである。ここまでは本能、つまり生命本来の為し得た仕事であるが、知性は無生の物質を選択して無限に多様な道具を作り出す。

## ② 直観と知性

意識は物質の習性に適應する必要から知性の方向へ自己決定せねばならなかったが、直観は漠然たる形ではあるがやはり存続している。「そのように消え去ろうとして所々にしか対象を照らさぬ直観を哲学は奪い取らねばならぬ。



それらの直観を先  
 ず確保して次にそ  
 れらを拡張し、か  
 くして直観をそれ  
 らの間で接させ  
 ねばならぬ。この  
 仕事が進展するに  
 つれて、哲学はそ  
 れだけ次のことが  
 わかってくる。直  
 観は精神そのもの  
 であり或る意味で  
 生命そのものでは  
 ない。知性は物質を  
 産み出した過程を  
 真似た過程によっ  
 てそこに切り取ら  
 れるのである (a  
 722) ]

一元性	<p>①《真の一元性》は超意識からの見渡しに於て言い得る。超意識は仮説と言えなくはない。諸々の世界を考察して噴出の連続を中心として立てる場合も、同じであろう。</p> <p>②一元性の二分枝の一つとして意識から独立な物質を立てなければ、科学は自己の拠点を失うのではないか。</p>
進化運動の研究	<p>①生命の根元のはずみは心的であり、超意識にかかわるであろう。根元のはずみを問題とすると、それは《どこまでも確からしさを増す仮説》を孕んでいる。</p> <p>②生命の根柢に存する意識と物質から如何にして「生存方式」即ち生物体が成立したか。先在する物質に意識が突き入るなら、排斥すべき《形相質料合体論》と同じ程の困難が生じないか。意識は自分が弛緩さえすれば拡がって生物体となり得たか。つまり、敢えて形相・質料の語を用いれば、両者を共に産出し得たのか。</p>
直観	<p>本能は知性から助力を受けて直観に高まる。或いはむしろ直観からの低落にこそ本能と知性は存するというのか。しかし我々の研究の出発点が知性である限り、やはり本能・知性の協働による直観への復帰を記述する仕事が残されてはいないか。</p>
知性と物質	<p>①知性は《暗々裡の表象としての空間》から《純粹空間》にまで下降する。そこに空間性の度合いを区別して明示する必要がある。</p> <p>②知性と物質の相互適応から両者の「共通形式」へ達する過程は、未だ十分に解明されていないのではないか。更に、物質を空間に合致させる科学が、「共通形式」へ向って行うべき自己修正の方法論も残されている。</p> <p>③物 chose の成立は知性の構成によるというが、物質もまた物の方向へ進んでいるなら、単に知性のみ構成とは言えない。物質の一側面に於ける知性の自己再発見である。《再発見》は秩序についても言われた。再発見というからには知性は既に自己を知っていた。そのとき知性の生成を説くことが意義を持つか。持つとすれば知性の発展段階を詳述せねばならぬ。</p>
認識	<p>物質は物ではなく運動である。意識もまた運動である。かくすれば二つの運動の間に《間隙はない》ことになり両者の出合いに何の困難も生じないのか。他方物質は無延長から弛緩した延長であるとも言われる。意識は本来無延長で弛緩すればそのまま延長となるのか。二者の出合い——認識論は、見る能力としての意識からどのように説明されるか。意識は物質を他者としてはならないのであろうか。</p>

哲学は諸直観の確保・拡張・接合である。この仕事は一挙には遂行できず「自然と精神の間を往復し続ける」必要がある。

「直観哲学 une philosophie d'intuition (p. 723)」は知性を排斥する哲学ではなくて、「知性を再び直観の中へ吸収しようと努める哲学 (p. 724)」である。知性の生成・位置及び機能の解明がそのための或る試みであったのだらう。意識は物質を通り抜けようとすれば物質に乗る他はない、「この適応が所謂知性からこそ l'intellectualité である (p. 724)」このような適応は知性の成立以前に既に生物体が果してきたものではないか。そうであれば本能と知性の間に明確

な一線を引くことは困難となろう。だからこそまた知性を再度流体に溶解することも可能となるのであろう。

③ 一元性の哲学に於ける諸問題

先に見た《真の一元性》の哲学を超意識から見渡すことができる。そこに発生する幾つかの問題を前表に示す。これらの諸問題はいずれをとってみても、いわば究極点を残す開かれた哲学を示しているのである。 (了)

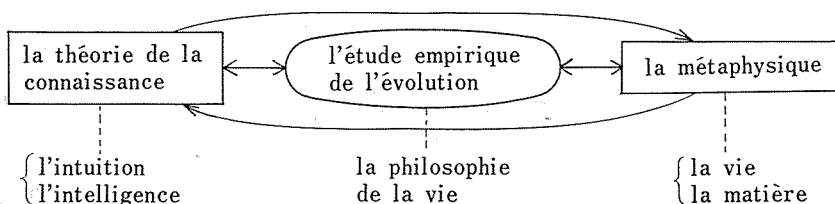
(筆者 京都大学文学部〔西洋哲学史〕助手)



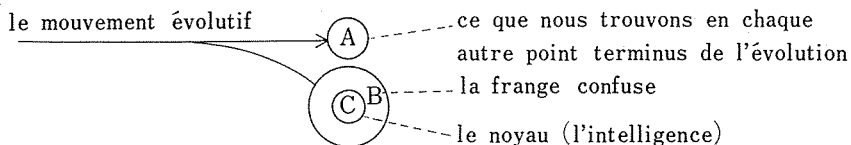
## La métaphysique et la science chez Bergson

par Fumitaka Tsutsui

Ce qu'on peut appeler le système de la philosophie de Bergson est précis dans «L'évolution créatrice (Henri Bergson, Oeuvres, P.U.F.) p.646». C'est un mouvement circulaire qui se compose de trois éléments: l'étude empirique de l'évolution, la théorie de la connaissance et la métaphysique.



La méthodologie de «la philosophie de la vie» est représentée de la façon suivante: (1) il faut d'abord chercher A, (2) et ensuite tirer B. (3) Il faut que A et B se montrent de même substance. (4) Nous devrions rendre compte de la condensation de B en C. (5) comment est-il possible de fondre A, B et C? Et qu'est-ce qui résultera de leur fusion?



Torpeur végétative, instinct et intelligence sont les éléments qui coïncident dans l'impulsion vitale.

Puisque la vie est un certain effort pour obtenir certains résultats de la matière brute, les deux formes de l'activité psychique (instinct et intelligence) sont les deux moyens différents sur la matière inerte. «L'intelligence est la connaissance d'une forme, l'instinct implique celle d'une matière (p. 621).» Entre ces deux connaissances existait une différence de degré quand on envisageait combien de clarté de la conscience s'y manifestait. Maintenant

apparaît une différence fondamentale (c'est-à-dire une différence d'object).

L'intuition est «l'instinct devenu désintéressé, conscient de lui-même, capable de réfléchir sur son objet et de l'élargir indéfiniment (p. 645).» Mais on remarque que l'instinct agit seulement sur des choses intéressées, la conscience y est annulée, il ne retourne plus sur ses pas et le domaine où il agit est limité. Ce que l'intuition exige appartient, à nos yeux, au domaine de l'intelligence. Comment surpasser ce désaccord ? Une manifestation de l'intuition est-elle possible quand l'instinct se réveille à l'exemple de l'intelligence (cf. figure 3) ? Mais l'instinct ne signifiera jamais la juxtaposition simple de l'instinct à l'intelligence.

Instinct et intelligence se détachent l'un et l'autre sur le fond unique, qu'on pourrait appeler «la Conscience en général (p. 653).» Intellectualité et matérialité se seraient constitués, dans le détail, par «adaptation réciproque (p. 653).» Il semble qu'une dualité provisoire s'établisse avant d'arriver à «l'unité vraie, intérieure et vivante (p. 664).» Cette dualité implique la manifestation de l'intuition et le devenir de l'intelligence qui se développait avec la matière (cf. figure 4 et 5).

L'intelligence une fois atteinte opère de la façon suivante : (1) elle a déjà contenu une géométrie latente à notre représentation de l'espace. (2) Elle divise la matière selon l'ordre de cette géométrie. (3) Des «choses» sont ainsi atteintes. Mais nous pouvons nous demander : comment l'intelligence a pu arriver à «la forme commune» — commune à la matière. Cette forme devrait être le lieu vers lequel la science convergerait. Dès lors que nous partons de l'intelligence, nous devons expliquer en détail la route sur laquelle l'intelligence coopérerait avec l'instinct pour retourner à l'intuition.

Une autre question s'ajoute à celle-là : comment «un modus vivendi» (l'organisation) est-il né de la conscience et de la matière ? Si nous exigeons que la matière soit préexistante, nous serions devant autant de difficulté que la théorie de la *forme-matière-incorporation*, que nous devrions exclure de notre philosophie.

«La philosophie d'intuition», quoiqu'elle soit une philosophie qui s'efforce de réabsorber l'intelligence dans l'intuition, implique une «hypothèse» vaste (la supraconscience) et une dualité provisoire. Celle-ci contient le problème

de la genèse de l'intelligence. Celle-là se demande si la manifestation de l'intuition sera possible.